

「万葉集を讀む」

平成十五年十一月八日 桐生広沢公民館

「恋の歌をよむ」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

A・一途な思い

朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて去にし子ゆゑに

一一・二三九四 柿本人麻呂歌集

何せむに命継ぎけむ吾妹子に恋ひざる前に死なましものを

一一・二三三七七 柿本人麻呂歌集

君が目を見まく欲りしてこの二夜千歳の如く吾は恋ふるかも

一一・二三三八一 柿本人麻呂歌集

朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕触れてしものを

一一・二五七八 作者不明

磯城島の日本の国に二人ありとし思はば何か嘆かむ

一一・三二四九 作者不明

多摩川に曝す手作さらさらは何そこの児のここだ愛しき

一四・三三三七三 東歌(武蔵)

B・届かぬ思い

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ

八・一五〇〇 大伴坂上郎女

今は吾は死なむよわが背生けりともわれに寄るべしと言ふといはなくに

四・六八四 大伴坂上郎女

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づくがごと

四・六〇八 笠女郎

C・女性の名前

難波瀧潮干に出でて玉藻刈る海未通女ども汝が名告らさね

九・一七二六 丹比真人

漁する人を見ませ草枕旅行く人にわが名は告らじ

九・一七二七 海未通女

隼人の名に負ふ夜声いちしろくわが名は告りつ妻と恃ませ

一一・二四九七 柿本人麻呂歌集

隠沼の下ゆ恋ふれば為方を無み妹が名告りつ忌むべきものを

一一・二四四一 柿本人麻呂歌集

D・母

たらちねの母が手放れ斯くばかり為方なき事はいまだ為なくに

一一・二三六八 柿本人麻呂歌集

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに

一一・二五三七 作者不明

たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年そ経ぬべき

一一・二五五七 作者不明

汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ

一四・三五一九 東歌(未勘国)

E・人の目・人の噂

暫くも見ねば恋しき吾妹子を日に日に来れば言の繁けく

一一・二三九七 柿本人麻呂歌集

心には燃えて思へどつつせみの人目を繁み妹に逢はぬかも

一一・二九三二 作者不明

人言を繁み言痛みわが背子を目には見れども逢ふよしも無し

一一・二九三八 作者不明

うつせみの人目繁けばぬばたまの夜の夢にを継ぎて見えこそ

一一・三〇八 作者不明

青山を横切る雲の著ろくわれと咲まして人に知らゆな 四・六八八 大伴坂上郎女

人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る 二・一一六 但馬皇女

F・なかなか逢えない

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも 四・四九六 柿本人麻呂

恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば

四・六六一 大伴坂上郎女

如何ならむ名を負ふ神に手向けせばわが思ふ妹を夢にだに見む

一一・二四一八 柿本人麻呂歌集

妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬか其を因にせむ

一一・二六八五 作者不明

G・来ない男

見わたせば近きわたりを廻り今か来ますと恋ひつつそ居る

一一・二三七九 柿本人麻呂歌集

相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えず祈誓ひて寝れど

一一・二五八九 作者不明

夕トにも占にも告れる今夜だに来まさぬ君を何時とか待たむ

一一・二六一三 作者不明

春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや 一〇・一九一七 作者不明

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを 三・三九六 笠女郎

H・人妻

験なき恋をもするか夕されば人の手まきて寝らむ見ゆゑに

一一・二五九九 作者不明

息の緒にわが息衝きし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも

一一・三一一五 作者不明

人妻と何か其をいはむ然らばか隣の衣を借りて着なはも

一四・三四七二 東歌(未勘国)

I・夫婦

われはもや安見児得たり皆人の得難にすとふ安見児得たり 二・九五 藤原鎌足

思はぬに到らば妹が嬉しみと笑まむ眉引き思ほゆるかも

一一・二五四六 作者不明

わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし

八・一六五八 光明皇后

君がため手力疲れ織りたる衣ぞ春さらばいかなる色に摺りては好けむ

七・二二八一 柿本人麻呂歌集

信濃道は今の壘道刈株に足踏ましなむ履着けわが背 一四・三三九九 東歌(信濃)

つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し 歩より行けば 見ること

に 哭のみし泣かゆ 其思ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と わが持て

る 真澄鏡に 蜻蛉領巾 負ひ並め持ちて 馬買へわが背

一一・三三三四 作者不明

真澄鏡持てれどわれは験なし君が歩行よりなづみ行く見れば

一一・三三三六 作者不明

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ

一一・三三三七 作者不明

紅は移るふものそ椽の馴れにし衣になほ若かめやも

一八・四一〇九 大伴家持

J・問答

わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後 二・一〇三 天武天皇

わが岡の霰に言ひて落らしめし雪の推けし其処に散りけむ

二・一〇四 藤原五百重娘

あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに

二・一〇七 大津皇子

吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを

二・一〇八 石川郎女

K・遠く離れて

草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも 二・三一八四 作者不明

梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて 一九・四二六三 作者不明

君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

一五・三五八〇 遣新羅使人の妻

わが妻はいたく恋ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘れず

二〇・四三三二 若倭部身麻呂/遠江防人

吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむわが妻かなしも

二〇・四三四三 玉作部広目/駿河防人

蘆垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ

二〇・四三五七 刑部千国/上総防人

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらば清かに見む

二〇・四四二四 物部刀自売/武威防人妻

防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず

二〇・四四二五 防人妻(昔年)

君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほるぼさむ天の火もがも

一五・三七二四 狭野弟上娘子

塵泥の数にもあらぬわれ故に思ひわぶらむ妹が悲しさ 一五・三七二七 中臣宅守

畏みと告らずありしをみ越路の手向に立ちて妹が名告りつ

一五・三七三〇 中臣宅守

あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに哭のみし泣かゆ

一五・三七三一 中臣宅守

帰りける人来れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて

一五・三七七二 狭野弟上娘子

わが背子が帰り来まさむ時の為命残さむ忘れたまふな

一五・三七七四 狭野弟上娘子

L・死別

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに 二・二〇三 穂積皇子

吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき

三・四四六 大伴旅人

妹と来し敏馬の崎を還るさに独りして見れば涙ぐましも 三・四四九 大伴旅人

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり 三・四五二 大伴旅人

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごと見せましものを

五・七九七 山上憶良

妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なくに 五・七九八 山上憶良

大野山霧立ち渡るわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる 五・七九九 山上憶良

福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く 七・一四二 作者不明

我が背子を何処行かめとさき竹の背向に寝しく今し悔しも

七・一四二二 作者不明